

## 大学生の進路選択行動に影響を与える要素

肥 田 幸 子  
澤 田 節 子

愛知東邦大学

## 大学生の進路選択行動に影響を与える要素

肥田幸子  
澤田節子

### 目次

- I. はじめに
- II. 問題抽出と目的
- III. 研究方法
- IV. 研究結果
  - 1. 就職活動時期が就職決定結果に与える影響
  - 2. 学生の特性と進路決定行動
  - 3. 学生が役立ったと考えている支援
  - 4. 就職活動過程における学生の自由記述
- V. 考察
  - 1. 縦断的調査からみえたもの
  - 2. 就職活動体験で得られたもの
- VI. おわりに

### I. はじめに

大学生の就職環境は相変わらず厳しい。平成23年3月卒業予定者の就職内定率は68.8%（2011年12月1日現在）、昨年同期比4.3ポイント減である〔1〕。日本経済団体連合会は2011年3月に「採用選考に関する企業の倫理憲章」を改訂。企業の採用活動開始を前年度より2ヶ月遅い、卒業・修了学年前年の12月以降とすることを決めた。これによって、心理的に焦った学生の就職活動の前倒はかえって加熱され、また、その動きに乗り切れず、就職活動から遠のく学生の二極化を生んでいるとしている〔2〕。

このような社会的状況のなかで、進路選択行動、求職活動を積極的に行わない学生、あるいは情報に振り回され早めに行動するのだが、数度失敗すると就職活動から遠のいてしまう学生がいる。これらの学生に対し、どのような支援をどの時期に行うかを探ることが喫緊の課題である。

肥田・澤田〔3〕は、就職活動を開始する3年次の学生を対象にした就職支援と社会スキルの関係を調査、発表した。本研究は、それらの学生の就職活動と進路決定を追った縦断的な調査研究である。これによって、活動時期や活動内容、学生の持っているスキルと結果の関連の一端が明らかになり、有効な就職支援の時期や方法を探ることが出来ると思える。

## Ⅱ. 問題抽出と目的

都筑〔4〕は「大学生の進路選択と時間的展望」のなかで、2年生では、自分の進路希望がまだ十分に固まっていない模索の段階であるが、3年生ではかなりの程度に進路希望が確定され、進路選択のための実際の準備活動が始める実行開始の段階だといえる。そして、3年生の時点で行う進路選択の準備活動が、進路選択の自己効力の強さと相まって、その後の進路決定過程に促進的な効果を及ぼすと考えられると述べている。

本研究の対象者たちには3年次に就職活動支援プログラムとして、就職合宿<sup>1)</sup>が提供された。この就職合宿は事前研修、フォローアップも実施され、対象者の学内環境においては、柱となる準備活動であるといえる。対象年度学生の卒業時に再度、就職に関する調査を行った。3年次の就職合宿に参加することは、しないことに比べて、進路決定に影響するかどうかを検討した。

また、3年就職合宿実施時にKikuchi's Scale of Social Skills〔5〕によって、参加者の社会スキルの高さを測定した。社会スキルの高さと都筑〔4〕のP.95-124)のいう「進路選択の自己効力」は「自信」という面において、共通した要素をもっていると考える。野崎ほかは社会スキルと自己効力感の相関を明らかにし、特に行動の積極性の面を指摘している〔6〕。ゆえに、社会スキルの高さが進路決定において何らかの関連をもつことが明らかになれば、それらの強化を視野に入れることで、より実効性の高いプログラムを学生に提供することができる。

上記のような統計的手法から得られるものは条件と結果である。よい結果を得るために、どのような支援をどの時期に行うかは明らかになるが、支援者サイドの研究であることは否めない。よって、学生自身の感じていることを大切にするために、調査の記述内容を分析した。記述を詳細に検討し、カテゴリー化することで、学生の視点に立った援助の方法を探ることができた。

本研究では、支援の時期を探る意味において、3年生の準備活動は結果に反映されたのか、学生の就職活動にとりかかる時期と効果の関連性はあるのか、学生の特性（社会スキルの高さ）は影響したのかを明らかにした。そして、就職活動を終えた、あるいは就職できずに卒業を迎えた学生の自由記述をもとに大学生の望む支援を探ることを目的とした。

## Ⅲ. 研究方法

### 1. 調査時期

- 1) 調査A：2009年11月 A大学R学部、同12月 H学部（3年就職合宿時）
- 2) 調査B：2011年3月（上記学部、学科の卒業時）

### 2. 調査対象

- 1) 調査A：A大学R学部3年生61名（全学部からの44%の参加者）、H学部N学科3年生60名（全学科71%の参加者）計121名
- 2) 調査B：2010年度卒業生の卒業時に、R学部113名、H学部118名 計231名

### 3. 調査方法

- 1) 調査A：就職合宿会場内において、質問紙を配布し記入を求めた。回収率は99%。
- 2) 調査B：卒業式後に、質問紙を配布し記入を求めた。回収率は88%。

#### 4. 調査内容

1) 調査A : Kikuchi's Scale of Social Skills ([5] のp. 66-68) を使用した。

質問項目は18問、「いつもそうだ」から「いつもそうではない」の5件法で求めた。

2) 調査B : 調査用紙は資料1

(1) 進路が決定しているか、就業形態は、正社員、契約社員、派遣社員であるか。

(2) 就職に関する決心や行動を始めた時期。

(3) 就職に関する関心の度合。

(4) 内定取得に何が役だったのか。

(5) 自由記述 : 分析方法は以下のように行った。①自由記述されたデータを2人の研究者でくり返し読み、意味内容が把握できないものは無効とした。②生データは一文を一コードとしてコード化した。③各コードを読み取り、類似性・相違性に従ってまとまりを作り、そのまとまりをサブカテゴリーとして命名し、さらにサブカテゴリーを確認した上で、カテゴリーとして抽象化した。なお、関係者への謝辞等は除外した。

#### 5. 倫理的配慮

学生に調査目的と守秘義務、協力の自由と拒否によって不利益を被らないことを口頭で説明した。質問紙の提出をもって同意を得た。また、調査結果の公表について同時に許可を得た。

### IV. 研究結果

#### 1. 就職活動時期が就職決定結果に与える影響

2010年度卒業生で、進路アンケートに応えた231名のうち、正社員、契約社員、派遣社員として就職内定が確定しているものを就職決定者、アルバイトあるいはアルバイトをしながら就職活動中の者を就職未決定者とした。

##### 1) 就職合宿(3年次の準備活動)は進路決定過程に促進的な結果を及ぼしたか。

2009年就職合宿参加資料の得られたR学部、H学部N学科159名を対象とした。就職決定者と

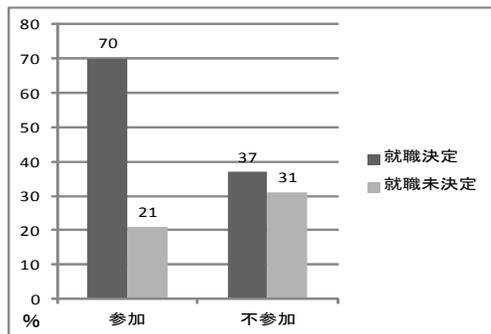


図1. 就職決定結果と就職合宿参加

未決定者と合宿参加者と不参加者のクロス表からグラフを作成し、相違がみられるかを調べるために $\chi^2$ 検定を行った。

図1からも明らかなように、参加者の就職決定率は高い。 $\chi^2$ 検定の結果 $\chi$ 二乗値は8.96、有意確率は.003であった。

$$\chi^2(1)=8.96, P<.05$$

##### 2) 早期の活動は良い結果に結びつくのか。

欠損回答を除き、就職決定者は153名、就職未決定者は61名を対象とした。

活動の時期を各学年の前・後期で8期に分け、それぞれの設問に対する時期を図示した。図2～4は各質問の回答を全決定者、全未決定者を100としたパーセントで表したグラフである。棒グラフは各時期のパーセント（1軸）で、折れ線グラフはその累計（2軸）を示している。

### （1）就職決定者と未決定者が就職について考え始めた時期

図2は学生が就職について考え始めた時期である。大半は3年生の前・後期、4年生の前期である。この3期で、就職決定者の合計は71%になり、未決定者の合計、55%と比べると多くがこの時期に活動を始めたといえる。

大学1年生の前期ですでに就職について考え始める学生がいる。就職未決定者の20%は、1年の前期という早い時期に就職について考え始め、そして、13%の学生は4年生の後期になって考え始める。

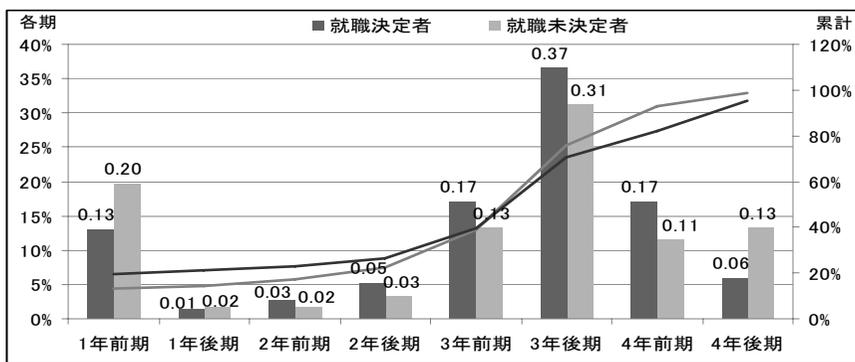


図2. 就職について考え始めた時期

### （2）情報収集を始めた時期

図3は就職に関する情報を集め始めた時期である。インターネットなどで、学生が活動を始めるのは、企業が情報を出し始める3年生の後期が最も高い。ここでも、1年前期と4年後期に未決定者の率が高い傾向がみられる。

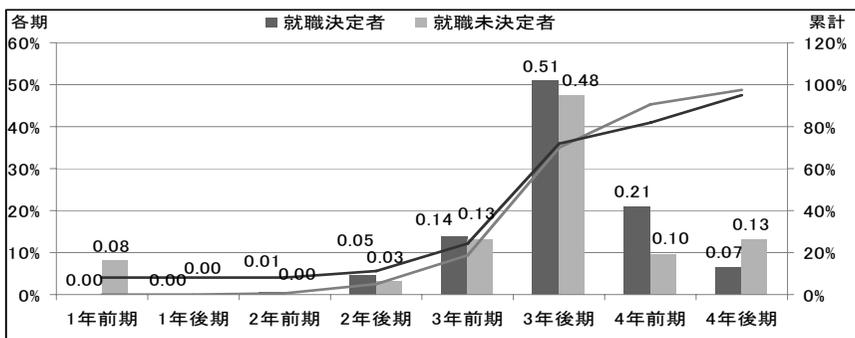


図3. 情報を集め始めた時期

### (3) 企業訪問、企業展など学生が実質的な活動を始めた時期

表1は実質的な行動を伴った就職活動を学生が始めた時期を示している。これも企業の求人時期に合わせて、3年生の後期が最も高い率になっている。4年生の前期では、就職決定者が高く、後期では、未決定者が高くなるという結果であった。(グラフは図3とほぼ同様のため表のみ)

表1. 実質的な活動を始めた時期(企業訪問・企業展)

	数値は%							
	1年前期	1年後期	2年前期	2年後期	3年前期	3年後期	4年前期	4年後期
就職決定者	0	0	0	1	8	46	32	10
就職未決定者	2	0	0	0	5	51	18	15

### (4) 採用結果が初めて出た時期

図4は採用の可否に関わらず、採用試験の結果が初めて出た時期を示している。未決定者は不採用であったか、採用を辞退した者であると考えられる。就職決定者は4年生後期になっても決定者の数を増やしているが、未決定者は4年生の後期には少ない。

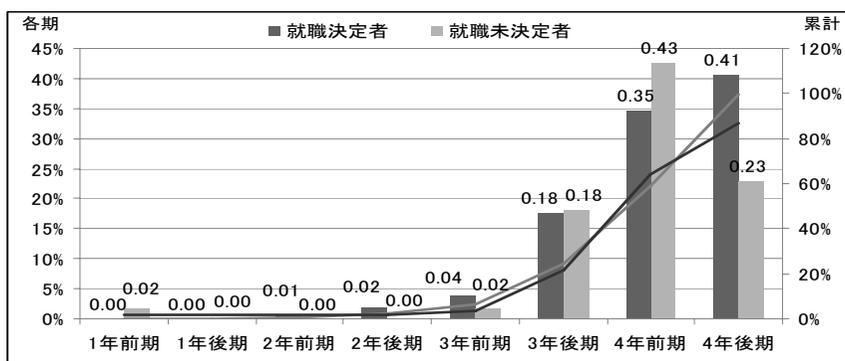


図4. 採用結果が初めて出た時期

### (5) 各時期において、就職決定者と未決定者の間に相違があるといえるのか

(1)から(4)の質問の各時期において、就職決定者と未決定者間に有意な差が認められるかを $\chi^2$ 乗検定で求めた。「情報を集め始めた時期」の1年前期は $\chi^2(1) = 13.37$ ,  $P < .05$ 、「就職結果が初めて出た時期」の4年生前期は $\chi^2(1) = 4.40$ ,  $P < .05$ 、4年生後期は $\chi^2(1) = 4.29$ ,  $P < .05$ で有意差が認められた。「就職を考え始めた時期」の4年生前期は $\chi^2(1) = 3.58$ ,  $P > .05$ であったが、高い $\chi^2$ 値が求められた。

## 2. 学生の特性と進路決定行動

### 1) 社会スキルと就職決定、未決定との関連

Kikuchi's Scale of Social Skills ([5] のP. 66-68) を対象学生が就職活動を始める前(3年生後期)に測定した。この社会スキル得点を就職決定者と未決定者の間で比較したところ、有意な差は認められなかった。

しかし、肥田・澤田 [7] において見出されている4つの因子、①問題解決スキル、②コミュニケーションスキル、③マネジメントスキル、④アサーションスキルにおいて、因子別質問の平均点を比較すると表2のようになった。有意差はなかったが社会スキル因子4、つまりアサーションスキルが決定、未決定と最も関連が高かった。

表2. 社会スキルの就職決定、未決定別平均値とSDおよびt検定の結果

	就職決定N=69		就職未決定N=21		t 値	有意確率
	平均	SD	平均	SD		
因子1. 問題解決スキル	3.36	0.56	3.39	0.51	0.39	0.70
因子2. コミュニケーションスキル	3.21	0.80	3.67	0.73	0.80	0.43
因子3. マネジメントスキル	3.28	0.75	3.31	0.67	0.15	0.88
因子4. アサーションスキル	3.39	0.72	3.71	0.75	1.81	0.07

2) 関心の高さ(就職決定行動)は就職決定、未決定および、社会スキルとどのような関連があるか。

(1) 就職決定行動(就職に関することで年長者と相談した程度など)

富安 [8] を参考にし、インターネットの利用など、現代事情も加味して質問を設定した。平均値を就職決定者、未決定者で比較したところ、結果は表3のようであり、有意な差が見出された。

表3. 就職決定行動の就職決定、未決定別SDおよびt検定の結果

	就職決定N=151		就職未決定N=61		t 値	有意確率
	平均	SD	平均	SD		
関心の度合い(就職決定行動)	2.81	0.77	2.57	0.72	2.09	0.04*

\*p<.05

(2) 社会スキルとの関連

関心の高さ(就職決定行動)平均の上位30名と下位30名に対しt検定を行った。結果は表4に示した。有意差はなかったが、因子2コミュニケーションスキルにおいて、比較的高い差が認められた。

表4. 社会スキルの関心の高さ(就職決定行動)別平均値とSDおよびt検定の結果

	関心の高さ高群N=30		関心の高さ低群N=30		t 値	有意確率
	平均	SD	平均	SD		
因子1. 問題解決スキル	3.37	0.48	3.38	0.60	-0.09	0.93
因子2. コミュニケーションスキル	3.47	0.87	3.08	0.78	1.84	0.07
因子3. マネジメントスキル	3.31	0.72	3.20	0.83	0.50	0.62
因子4. アサーションスキル	3.47	0.60	3.60	0.76	-0.76	0.45

### 3. 学生が役立ったと考えている支援

①授業内での指導(仕事についての考え方、試験対策) ②講座 ③就職合宿 ④企業展その他イベント ⑤就職課での指導(例履歴書の書き方、面接指導)の各質問について、役だったと応えた学生のうち、就職決定者と未決定者の差があるかどうかを $\chi^2$ 検定で分析した。

- ①授業内での指導  $\chi^2(1) = 3.93, P < .05$  ②講座  $\chi^2(1) = 0.34, ns$  ③就職合宿  $\chi^2(1) = 1.98, ns$   
④企業展その他イベント  $\chi^2(1) = 6.00, P < .05$  ⑤就職課での指導  $\chi^2(1) = 7.57, P < .05$

#### 4. 就職活動過程における学生の自由記述（資料2）

##### 1) 就職支援を受けながら活動した

各種の支援を受けながら活動した内容をみると、①「就職課に早めに行くこと」、②「親密にしてもらったのでよくできた」、③「十分に支援してもらったので満足です」など、就職課の指導や授業内の指導をうけながら活動を続けた。また、大学内での友人・知人、クラブ・サークル活動、教職員の利用などを積極的にしていた。

就職活動を始めたきっかけでは、R学部では、自分自身ではじめた、勉強会に参加、口利きもよい意味で利用した、サークルの「東邦職Do」での活動、友人と一緒に、職員に導かれて開始した、などであった。H学部では、自分で積極的に、友人の影響で始めた、試験日が近くなって応募、実習、ボランティア活動、公務員講座、サイトなど就職活動の流れの中で開始した、などであった。

##### 2) 諦めないで努力した

学生自身が努力した内容をみると、⑤「目先を広げて活動することがポイントです」、⑥「自分から積極的に動くことが必要」、⑩「諦めなければいける」、⑯「保育園の見学に行ったりして、自分に合うところを選ぶことが大切です」、⑱「積極的に実習に行ったことで内定を頂けた」としているように、自分から進んで活動したことやボランティアを兼ねて学習していた。

内定取得に何が役立ったかは、全体では就職課・授業内の指導となっており、講座が少なくなっていた。R学部では、知人のアドバイス、クラブなどの部活動、人脈の利用などであり、自分自身のやる気・思いきりを加えて挙げていた。H学部では、仲間と自身の努力、クラブの先輩の話、ボランティア活動、教職員に相談、友人と共に、実習などであり、自分の気持ち・意志・やる気などが重要としていた。

##### 3) 具体的な支援を希望する

活動内容・方法の指導を要望した内容をみると、①「もっと具体的な活動方法を教えてほしい」、②「前向きになるためのことを教えてほしい」、⑤「もっと早くから指導してほしい」、⑬「学内企業店が複数回あることをもっと大々的に示してほしい」など、具体的な支援の方法を挙げていた。そのなかで「もっと教えてほしい」「もっと指導してほしい」というように、「もっと」という副詞をつけた言葉が18件中9件、「もう少し」が2件あり、情報提供の工夫や指導方法に対する要望がみられた。

また、②「前向きになるためのことを教えてほしい」、③「私たちは例がなかったので、どの時期にどのようなことが、どれくらい必要であるかが分からなかった」、⑥「最初に何から手をつければよいか分からない」、⑨「中小企業の採用広告が少なく分らなかった」、⑱「就職合

宿後も月1のペースで就職活動に関わる講座がほしかった」など、具体的な活動内容や方法に対する指導を要望していた。

企業情報の入手先は、リクナビ、マイナビが全体的に多くなっていた。R学部では、大学から、エンジャパン、日系ナビ、新聞記事、バイト先、知人・教員の紹介などであった。H学部では、ネット、ハローワーク、ボランティア、友人・知人の紹介、大学の掲示板、求人票、大学のファイル、個人で探したなどであった。

#### 4) 卒業時点でも活動中である

卒業時点でも継続した支援を求めている内容をみると、①「就職がほぼ決まっていたが内定が取り消され、現在就職活動中」、③「自分がどんなことをやりたいのか、未だに分からない」、④「単位が余り取れていなく、4年生でも学校によく通っていたことが大きいと思う」など、種々の記述があった。また、⑦「頑張って教師になります」として、在学中は無理であったが、諦めないで非常勤講師の道を選んだ者もいた。

## V. 考察

### 1. 縦断的調査からみえたもの

#### 1) 活動時期が結果に与える影響

都筑（〔4〕 pp.95-124）は3年次に行う就職準備活動は、進路選択の自己効力の強さと相まって、その後の進路決定過程に促進的な効果を及ぼすと述べている。本調査においても、3年次に行う就職準備活動としての就職合宿と前後の研修参加は就職の決定、未決定に有意な差をもたらしている。

進路選択の自己効力の強さと進路決定の関連に関しては、浦上ほか〔8〕～〔12〕など、多数の研究がみられる。肥田・澤田（〔3〕のp.159）は3年次の就職合宿調査において、「自覚が出てきた」「課題や方向性が見つかった」「練習すれば力がつく」などの記述がみられ、カテゴリでも「自己の成長を実感」と命名できた。これらの研究が示すように、自分に目的を達成する力があると信じることで、行動は変化していく。本研究においても、3年次に行動を起こすことで自信をつけ、それが次の活動の原動力になり、結果につながったと考える。

また、就職合宿は積極的でない学生に対し、期日を決めて活動し始めることを強制する面ももっている。就職合宿を最も効率的な時期に設定することで、結果に反映させることが出来る。

活動時期においては、1年生前期から就職を考えたり、情報を集め始めるものが未決定者に有意に高い。また、未決定者は4年の後期になってから就職を考え始めるものも多く、就職決定者よりも活動時期からみると二極化の傾向を示している。これは、大学に入ってからすぐ、将来のことを考えようと情報収集をし始めたものの、持続できなくて中ダルミをしてしまった学生や、なかなか就職活動が始められず、4年生の後期になってやっと動き始めたが、結果が出ていない学生がいることを示している。

もう1点の顕著な特徴は、採用結果が初めて出た時期の4年生後期の差であろう。決定者は4

年生後期になってもあきらめずに活動を続けることで、結果を伸ばしていると考えられる。

## 2) 学生の特性と進路決定行動

社会スキルの高さは結果に結びつくかという点について、全般的な有意差はないが、因子別に見た平均点の差ではアサーションスキルが比較的高い。アサーションスキルとは相手の立場も考えながら、自分の考えを相手に伝えていくスキルのことであり、この能力の高さは結果に結びついている。

関心の高さ（就職決定行動）は当然のことながら、就職決定、未決定に有意に関連しており、就職したいという意志とそれに伴う行動は、結果に結びつくということであろう。また、関心の高さと社会スキルの関係性においては、コミュニケーションスキルに高い関連がみられた。就職決定行動にコミュニケーションスキルは不可欠であり、スキルアップを図るための学生支援が有効であろう。

## 3) 学生が役立ったと考えている支援

就職が決定した学生は、授業内での指導、企業展その他イベント、就職課での指導については役に立ったと応えており、講座や就職合宿についてはあまり感じていない。就職合宿参加者が就職決定に有意に働いていると結果が出ているにもかかわらず、学生の感じ方は別の結果を示している。これは、就職課の指導や授業内での指導は学生個人に対して指導する個別対応をしている部分が多く、講座や就職合宿は集団で参加し、そこから何を学ぶかは学生自身が見つけていかなければならない。この結果は、対象群のタイプに影響される可能性があるが、本研究の対象者の場合は個別のきめ細やかな対応の方が、学生の希望に沿ったものであると推測される。

2)、3) の関連を図5にまとめた。

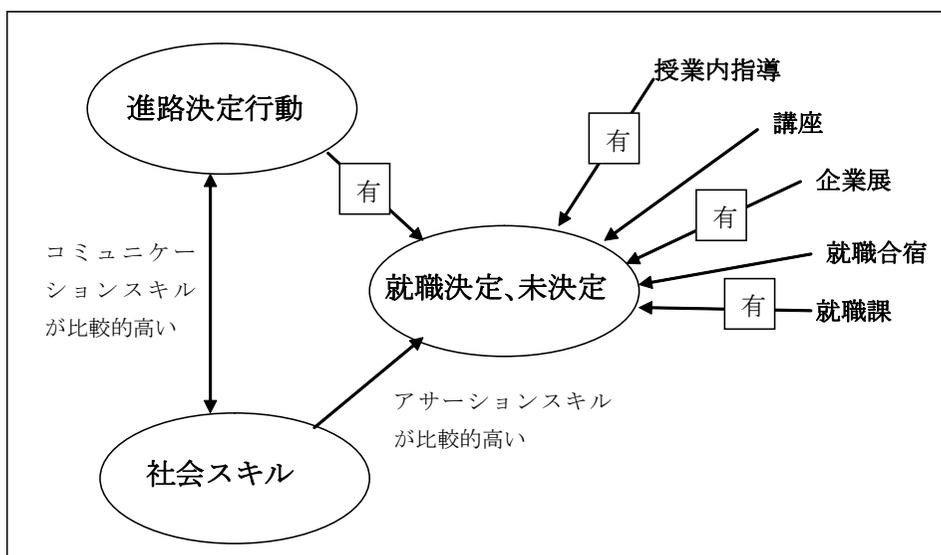


図5. 進路決定行動、社会スキル、その他支援が就職の決定未決定に与える影響

## 2. 就職活動体験で得られたもの

### 1) 就職活動の過程で培われた能力

就職活動で内定取得に役立ったとしているのは、あらゆる機会を捉え情報収集することや自己PRすることが挙げられていた。活動に際しては、「親密になる」「ご縁を大切にする」というように、学生自身が就職課などでの支援の必要性を自覚し、自主的に行動していたものと推測される。つまり、周囲の人の提案に応えられる姿勢や態度、加えて粘り強く取り組む忍耐力が重要なのである。この場合、社会スキルでいうコミュニケーションスキルを活用し、対人関係能力を深めていったものと思われる。

就職活動をするということは、自分の将来を考え何らかの努力と共に能力が求められる。それは「自信を持つこと」、「自分のやる気」など本人の一步踏み出す力があるか否かであり、3年次までに前に踏み出せるような力を養っておくことである。記述内容にある「目先を広げて活動する」とか「自ら行動する」ことが、内定取得の成否を分けることになることから、学生自身が積極的に行動する力を身につけておくことである。

一方、記述内容にある「自分の努力の少なさ」「考えすぎないこと」「諦めなければいける」「やるっきゃない」など、一見マイナス要素を含む言葉であるが、重要用語である。おそらく彼らは、何回かの不採用通知に心身共に落ち込むことがあったであろう。これらは、学生自身が就職活動を振り返り、自己の困難に対処した実体験からでた言葉でもある。まさに彼らが自己の目標に向かって進もうとした証しであり、自分の道を見つけるために、思考しつつ将来を見つめ、決断力や協調性を身につけていったものと推測される。

### 2) 自己効力を高められる支援

就職活動時期は全国の大学が一斉に開始するため、多くの学生が大手企業に殺到するということもありうる。また、人気の高い企業などは、時間差で定員を超えてしまうことや情報の見落としで申込みもできない状況もあろう。そのため、大学ではこの時期に学生の就職活動が十分に行えるように準備をしておくことである。本調査の結果をみると、具体的な指導と情報提供を望んでいる。なかでも中小企業の情報が少ないとしていたことである。

中小企業の採用について朝日新聞によると、「学生の大企業志向が強すぎて採用意欲のある中堅・中小企業に目が向かないミスマッチ」・・・「2011年内定率が91%に落ち込んだ以降からの傾向である」と報じている [13]。本学でも、早期から中小企業の企業展なども企画し紹介しているが、学生との間でミスマッチが生じていることや、時期的に合致していなかったことが挙げられる。

情報提供については、単に情報を多くすればよいというものでもない。むしろ彼らが活動しようとしたとき、適時に的確な情報や支援を求めているのである。就職活動を開始したときというのは、自己効力が向上し、未来イメージをもって前に進もうとしているときでもある。Taylor & Betzが提唱し、浦上 ([8] のp. 71) が検証した自己効力についてみると、「進路選択に対する自

己効力の強い者は、進路選択行動を活発に行い、また努力もする、そのためその行動は効果的なものになる」と述べている。このように進路選択行動が活発にできるようにするためにも、自己効力を高められる指導が肝要である。

就職活動に対する自己効力の向上を高める要素として、大学内で日常的に活動をしている姿を先輩がみることや、いつでも見聞きできる講座や場所があること。また、就職内定者から話を聞く機会を多くもつことなどが挙げられる。もちろん情報機器の活用や教職員からの個別指導も重要であるが、むしろ同じ境遇の先輩から話を聞いたかった、という反応もあったことから計画的に設けていく必要がある。

実際の就職活動でみると、彼らはあらゆる手段で情報を収集し、会社訪問などの計画をたて実行している。この過程の指導は概ねできていると思われるが、活動後の事後評価までさせているか疑問が残る。当事者にとって事後評価は、触れられたくない内容もありうるが、次へのステップにするためにも大切な事項である。

大学生が自分の進路を自分で決めるということは、当然のことのように思えるが、4年次になっても何から手をつければよいかと思案し、行動しようとしなない学生もいる。進路選択行動に影響する自己効力を維持し、継続させるためにも、学生個人が抱く不安に対し、支援室を設け、常時対応できる体制が整えられていることも重要な要素である。

### 3) 継続した活動の支援

卒業時期に、「自分がどんなことをやりたいのか、未だに分からない」という問いを発している者もいた。上田 [14] は、「自分の人生とは何なのかをことさらに考えなくても、『みんなと同じ』欲求を持ち、『みんなが目指す』人生を歩んでいれば、その十分な見返りが与えられていたのである」と述べているように、学生は学校というルールに乗って歩んできたことから、自分で余り考えないで今まで人生を送ってきたのであろう。

このような学生の中には、卒業時点でも目標が見出せなく、「周囲の援助を活用しようとしなない」「何かをすることに対して集中できない」としている者もいる。学生生活の4年間は、適度にアルバイトもしていると思われるが、何がしたいとか、絶対にこの道に進みたいというものがなかったのであろうか。

学生への個別の指導は、まず徹底して本人と話し合うことしかない。筆者自身は、当面の小さな目標を探し出し、一緒に考えることから始めている。学生本人は、何がしたいのか分かっていないことも多いが、1回30分位の時間を共有し、目途がつかなければ、再度時間を予約し話し合うというようにしている。なかには「強制的でも就職活動に誘ってほしかった」という声もあることから、繰り返し支援を続けていくことである。

また、記述の中で「単位が余り取れていなく4年生でも大学によく通っていた」と、単位取得と就職活動とを平行させていた学生は、両立の厳しさや難しさを訴えていた。このような学生に対し、教員は、学生の現状を理解せず単位の修得や就職指導をしてしまう傾向があるので、個々

の状況にあわせた指導をする必要がある。大学での学習は3年次までに必要な単位を取得しておく方が有利であるとはいえ、4年生になって集中力を発揮し、やり抜く力を具えている者もいることから、個を大切にしながら丁寧な指導が望まれるのである。

## おわりに

働くとは、辞書によると、「仕事をすること、作業・労働することである」としているように、生計を維持し、職業をえることにより生きる喜びが加わるなど、仕事をするこの意味は昔から変わっていない。坂東 [15] は「働くということ」のなかで、「世の中で一番楽しく立派なことは、一生涯を貫く仕事を持つことである。一番寂しいことは仕事のないことである」と、働くことの意義を広範囲に伝えている。いつの時代でも働くということは、単に就職先を見つけることだけではなく、その人の生き方や生涯の生き甲斐につながっているはずである。

今回の調査では、1年前期という早い時期に就職について考え始めた者もいたが、中ダルミしてしまい継続することが難しかったようである。その原因として、入学時に将来設計を描き目標につなげていこうとしているが、その意欲を保持させる1・2年次のプログラムが少ないことがあげられる。

それには大学1年次から4年次までに自己効力を高められる環境や状況を作りだし、将来を見据えて前に進むことができるようなプログラムが必要である。例えば、1年次は基礎学力の向上を目指すこと、2年次からはフィールドワークなどを活用し視野を広げられるようにすること、3～4年次は就職合宿を機に前に踏み出す力をつけることなどが考えられる。つまり、就職活動が始まる3年次後期までに、学生が自信をもって、自ら実行できる力を修得しておくことである。

就職活動の指導は単なる前倒しではなく、4年次前期までに活動の比率が高まるようにすること。そして夏季休暇を有効に活用し、4年次後期まで士気を継続させることであろう。したがって、4年次までに単位を取得できるように1年次からのカリキュラム指導を強力にする必要がある。しかし、現実的には4年生になっても修得単位が少ないため身動きがとれない学生もいるので、支援する教職員はその背景をよく理解することである。

さらに活動を開始しようとする3年次には、適時・的確な情報や具体的な支援ができるようにする。そして就職活動中は、十分に情報収集ができるようにし、計画をたて実行する、その後は、活動状況に対する事後評価ができるように支援する。同時に社会スキルとの関連で抽出されたアサーションスキルが比較的高かったことから、相手との対人関係能力を養うことが、進路選択行動には欠かせない要素である。

本研究においては、学生の職業選択及び実際の就職活動において、有効な要素を多面的に探った。まず、活動の時期を取り上げて、結果との検証を行った。そして、個々のスキルや自己効力が結果に与える影響を明らかにした。また、質的な検討において、彼らは失敗の経験ですら自らの糧とし、多くの力を得ていったことがわかる。どのような支援を学生が望んでいるかという点については、より具体的で、1年次から4年次までの切れ目のないプログラムが必要であること

が示唆された。

筆者らは多くの資料を、言い換えればなすべき多くの課題を手に入れたといえる。次なる課題はこれらを着実に実行し、それらの結果をより良い方向に修正していくことである。

最後に、調査にご協力をいただいた学生、就職課の皆様に感謝いたします。

## 引用文献

- [1] 文部科学省<http://www.mext.go.jp> 平成22年度大学等卒業予定者の就職内定状況調査（12月1日）及び厚生労働省との連携による未内定者に対する「卒業前の集中支援」の実施について 2011年.
- [2] 北国・富山新聞社 <http://www.hokkoku.co.jp/> 2012年1月.
- [3] 肥田幸子・澤田節子「大学生の就業意識形成のプロセスに関する研究」東邦学誌、40(1)、2011年、pp. 153-168.
- [4] 都筑学「大学生の進路選択と時間的展望」中央大学教育学論集、43、2001年、pp. 95-124.
- [5] 菊池章夫「Social Skill尺度の作成」東北心理学会、42回大会発表、東北心理学研究、38号、1988年、pp. 67-68.
- [6] 野崎智恵子・布佐真理子・三浦まゆみ・千田睦美「1年間の経過からみた看護大学生の社会的スキルと自己効力感、生活体験の関連」東北医短部紀要、11(2)、2002年、pp. 237-243.
- [7] 肥田幸子・澤田節子「大学生の就職活動に関する意識調査」東邦学誌、39(2)、2010年、pp. 65-80.
- [8] 富安浩樹「大学生における進路決定自己効力と進路決定行動との関連」発達心理学研究、8(1)、1997年、pp. 15-25.
- [9] 浦上昌則「学生の進路選択に対する自己効力に関する研究」名古屋大学教育学部紀要 教育心理学、42、1995年、pp. 115-126.
- [10] 浦上昌則「女子短期大学生の進路選択に対する自己効力と職業不決断-Taylor&Betz（1983）の追試的検討」進路指導研究、16、1995年、pp. 40-45.
- [11] 川瀬隆千・辻 利則・竹野 茂・田中宏明「本学キャリアプログラムが学生の自己効力感に及ぼす効果」宮崎大学人文学部紀要、13(1)、2006年、pp. 57-74.
- [12] 玉田和恵「自己効力感と入学動機・学業態度・就職活動との関連」東京経営短期大学紀要、6、1998年、pp. 95-109.
- [13] 朝日新聞朝刊、「名より実を取る企業選び」2012年2月17日.
- [14] 上田紀行『生きる意味』岩波新書、2005年、p. 21.
- [15] 坂東真理子『働くということ』NHK出版、2011年、p. 34.

## 【注】

- 1) ここでの「就職合宿」とは、調査対象大学が就職活動を始める3年次学生を対象に1泊2日で行っている就業力強化のプログラムである。

受理日 平成24年3月28日

資料 1

あなたの進路についておたずねします。

1. 該当箇所をチェックしてください。例

進路が決定している

就職先 ( ) 進学先 ( )

正社員  契約社員  派遣社員  大学院  研究生  専門学校

進路が決定していない

就職・進学以外に卒業後の進路を決めている。

家事手伝い  アルバイト ( )  その他 ( )

2. 就職に関する決心や行動を始めた時期に○をつけてください。

	一年生前期	一年生後期	二年生前期	二年生後期	三年生前期	三年生夏休み	三年生後期	就職合宿後	学内企業展二月	四年生前期	四年生夏休み	四年生後期
1) 将来や仕事について考え始めた時期												
2) 就職のための情報収集を始めた時期												
3) 就職活動を始めた時期(企業訪問・企業展他)												
4) 採用結果が初めて出た時期(採用・不採用)												

3. 就職活動を始めるのに何かきっかけがありましたか。チェックしてください。例  (複数回答可)

①. 学内  授業  各種対策講座  が'イタ'ンス  インターネット  合宿(合宿に参加・不参加)

②. 学外  企業展  セミナー  会社訪問  その他 ( )

4. 就職に関する関心の度合いをおたずねします。(数字に○をつけてください)

	4 多 い	3 やや 多 い	2 やや 少 な い	1 少 な い
1) 就職に関することで年長者(就職課・ゼミ教員他)と相談した程度	4	3	2	1
2) 就職に関することで仲間と相談した	4	3	2	1
3) 就職に関して、どの程度積極に取り組もうとしていたか(就職したい意志)	4	3	2	1
4) 企業展、セミナー、会社訪問、試験等(実質的にどの程度動いたか)	4	3	2	1
5) インターネットを活用した程度(リクナビ、マイナビ等)	4	3	2	1
6) 求人 NAVI J-NET を活用した程度	4	3	2	1

5. 内定取得に何が役だったと思いますか。例  (複数回答可)

授業内での指導(仕事についての考え方、試験対策)  講座  就職合宿  企業展その他イベント

就職課での指導(例履歴書の書き方、面接指導)  その他 ( )

6. 内定した企業の情報はどこから手に入りましたか。例

リクナビ  マイナビ  J ネット  学内企業展  学外企業展  その他 ( )

7. 就職活動に対する思いや不安、また、こんな支援が欲しかったということがあれば記入してください。  
また、現在、内定を取得できていない人はその理由について思いつくものがあれば記入してください。

資料 2

大学での就職活動に対する体験（自由記述）

カテゴリ	サブカテゴリー	記述内容のコード
就職活動で培った能力	対人関係能力 (就職課等の支援をうける)	① 就職課に早めに行くこと
		② 親密にしてもらったのでよかったです
		③ 十分に支援してもらったので満足です
		④ とりあえず、ご縁を大切にすべきです
	主体性・行動力 (自ら行動する)	⑤ 目先を広げて活動することがポイントです
		⑥ 自分から積極的に動くことが必要
		⑦ 私はたまたま運がよく就職できましたが、強制的にでもやらなきゃ決まらなかったです。
		⑧ とりあえず、行動すること。
	課題達成の意欲 (自己の困難に対処する) (根気・やる気が必要)	⑨ 考えすぎないこと
		⑩ 諦めなければいける
		⑪ やるっきやない
		⑫ 自信をもつことが大事
		⑬ 自分のやる気
	実習・アルバイト等を活用 (外部活動で視野を広げた)	⑭ 自分という人間をよく理解し、無理しないこと
		⑮ 初めは不採用通知が沢山きて、落ち込むことも多いと思うけど、そこを諦めたり現実逃避せずに取り組めば良いと思う
⑯ 保育園の見学に行ったりして、自分に合う所を選ぶことが大切です		
⑰ アルバイト先で努力しました。上司や社員の方に誘われました		
⑱ 積極的に実習に行ったことで、内定を頂けたと思っています		
⑲ 実際に面接したが練習より厳しくなかった		
基礎的知識・学力 (就職活動の振り返り)	⑳ 新聞を読みましよう	
	㉑ 勉強不足であった	
	㉒ 大変すぎた	
自己効力を高められる支援	具体的な就職活動の指導	① もっと具体的な活動方法を教えてほしい
		② 前向きになるためのことを教えてほしい
		③ 私たちは例がなかったので、どの時期にどのようなことがどれくらい必要があるかが分からなかったということが大きかったと思った
		④ もう少し(自分のことだけ)無理やりにもやってほしい。
		⑤ もっと早くから指導してほしい
		⑥ 最初に何から手をつければよいか分からない
		⑦ 教職について、もっと早くから取り組んでほしい
		⑧ どのように就職活動を始めたらいいか、保育系の就職活動はどのようなものなのか、就職活動を始める時期などももう少し具体的に知ることができたら良かったかなと思う
	情報提供の工夫	⑨ 中小企業の採用広告が少なく分らなかった
		⑩ 中小企業のことをもっと教えてほしい
		⑪ 求人票をもっと多くほしい
		⑫ もう少し大きく園の一覧を貼ってほしい
		⑬ 学内企業店が複数回あることをもっと大々的に示してほしい
		⑭ もっと保育園や幼稚園の情報がほしい
		⑮ 今の世の中の流れです
⑯ 先輩がいなかったため、情報や求人が少なく不安でした		
説明会・セミナーを増加	⑰ もっと沢山セミナーをやり、指導をしっかりとしてほしい	
	⑱ 就職合宿後も月1のペースで就職活動に関わる講座がほしい	
	⑲ 現場で働いている保育士などの先輩からの指導をもう少し増やしてほしい	
継続した支援	内定取り消し	① 病院への就職がほぼ決まっていたが取り消され、現在就職活動中
		② 目指していた消防への合格が決まっていたが、身体検査で定められていたものより低い結果が出たためやむなく不採用となった
	目標が見つからない	③ 自分がどんなことをやりたいのか、未だに分からない
	継続して活動する	④ 単位が余り取れていなく、4年生でも学校によく通っていたことが大きいと思う
		⑤ 自分の努力の少なさと気持ちの弱さが一番の原因であった
目標に向けて進む	⑥ 体育教員の人数が多くあふれているため	
	⑦ 頑張って教師になります	